

# 英雄叙事詩における英雄とは

——サハ（ヤクート）の英雄叙事詩を考察して——

山下宗久

## 一、はじめに

テュルク系・モンゴル系諸民族の口承文芸には様々なジャンルがあるが、その中で英雄叙事詩は重要な位置を占めている。英雄叙事

詩の主人公は当然のことながら英雄であるが、それでは、英雄とは一体、何者であるのだろうか。何が英雄を英雄たらしめているのだろうか。日本語の「英雄」という言葉から私たちが抱くイメージと、これらの民族の英雄叙事詩に登場する英雄とは、どの程度重なり合いい、どの程度ずれているのだろうか。英雄の概念そのものをきちんと検討してみる必要があろう。

テュルク系・モンゴル系諸民族の中で最も北に位置するサハ（ヤクート）の英雄叙事詩は、アルカイックで、神話的色彩が濃く、他のテュルク系・モンゴル系諸民族の英雄叙事詩とはかなり趣が異なっていて、英雄叙事詩における英雄とは何者であるのかを改めて考えさせてくれる。<sup>(註1)</sup>

サハの英雄叙事詩はサハ語で「オロンホ」と言い、英雄叙事詩というジャンルを指示する語として使われている。個々の英雄叙事詩の題名は、主人公の英雄の名で呼ばれる。主人公の英雄が親と子の二代、あるいは親と子と孫の三代にわたるときは、初代の英雄の名が題名になる。

短いもので数千行から一万行、長いものだと三万行から四万行にも及ぶサハの英雄叙事詩は、描写の部分と登場人物の会話の部分から成り、描写の部分は非常に早口で、滑らかに語られ、登場人物の会話の部分は歌われる。そして、登場人物によって歌の節が決まっていて、英雄や英雄の家族、英雄の馬、天界の善神の歌は、声をのぼして歌われ、「クリル・ハフ」と呼ばれる装飾音を伴う。楽器の伴奏は付かず、叙事詩語りは夜に行なわれた。

サハの英雄叙事詩の蒐集は一八四〇年代から始まり、現在までに約二三〇篇が蒐集されている。そのうち、梗概や断片ではない、完全なテキストは約一五〇篇あるが、出版されているのはわずか二〇篇足らずで、テキストの大半はまだ、ヤクーツク市にある古文書館

に保管されたままである。

サハ人の口承文学学者ニコライ・エメリヤーノフ氏は著書『サハのオロンホの梗概』（モスクワ、一九八〇年）で、七五篇のサハの英雄叙事詩の梗概を記している。本稿では、これをもとに、「英雄の出自」「容姿」「文化英雄」「遠征の動機」「変身モチーフ」といった側面から、サハの英雄叙事詩における英雄とは何者であるのかについて考察してみたいと思う。

## 二、英雄の出自

サハの英雄叙事詩の主人公である英雄の出自は、大まかに言えば、天界の善神の子や孫で、天界から地上世界に降ろされる場合と、地上世界に住む老夫婦の子どもとして生まれる場合と、出自を知らない場合の、三つに大別される。

まず、第一の場合の例として、英雄ディーライ・ベゲを取り上げてみよう。父も母も召使いもなく、たった一人で暮らしていたディーライ・ベゲは、自分の馬から出自を次のように知らされる。

英雄ディーライ・ベゲは、天界の最高神ウルング・アイー・トヨンの孫であるが、ウルング・アイー・トヨンの子である英雄もいる。英雄の中には、馬の守護神ジエヘゲイの子や孫である者もいる。また、英雄の祖父が天界から降ろされた馬で、その馬が人間の女と結婚して生まれたのが、英雄の母親（半人半馬）であるという話もあることから、英雄の出自と馬との関わりを指摘することができる。例として取り上げたディーライ・ベゲは、天界から追放される形で、人間の始祖となるべく、地上世界に降ろされたわけだが、追放されるという形を伴わないで、人間の始祖あるいはサハの始祖となるべく、地上世界に降ろされるという話の方が多い。また、地下世界の怪物に平穏な暮らしを乱されている地上世界の住民の訴えを、

「あなたのお母様はウルング・アイー・トヨンの三人娘の末娘で、お父様はハールディール・モフソゴルという天界の自由奔放な英雄です。あなたがお母様のおなかの中にいたとき、あなたのおじい様のウルング・アイー・トヨンが、馬の守護神と牛の守護神のために大きなお祭りを催しました。そして、おじい様に、黄

天界の善神が聞き入れ、天界の英雄とその妹が地上世界を防衛するべく、地上世界に降ろされるという話もある。

英雄が天界から降ろされるとき、または降ろされたあとで、英雄には馬や衣服や甲冑などが天界から与えられることがある。ある英雄叙事詩では、天界から与えられた馬の耳の中に英雄が入って、生命水と衣服と甲冑を得る場面がある。<sup>(註2)</sup>

先の英雄ディーライ・ベゲに出自由を知らせたのは、彼の馬だったが、英雄の母親や兄、天界の女シャマン、世界樹に宿る土地神が英雄の出自を知らせる話もある。

では、次に、英雄が地上世界に住む老夫婦の子どもとして生まれる場合を見てみよう。老夫婦の年齢は、夫が九十歳で妻が八十歳、夫が九十歳で妻が七十歳、夫が八十歳で妻が七十歳などと様々である。子宝に恵まれなかつた老夫婦に、待望の赤ん坊が生まれるが、時として、生まれてすぐに逃亡して、天界で養育されることがある。また、生まれてからずっと寝ていたり、醜い姿に驚いた両親に捨てられることがある。しかし、これらの子どもは、両親や兄弟姉妹が不幸に見舞われたときには、英雄として登場する。

老夫婦が天界の善神の子孫であるということや、老夫婦のうちの妻が、他の英雄叙事詩では天界から追放された女英雄として語られていることから、英雄が地上世界に住む老夫婦の子どもとして生まれる場合にも、英雄は天界の善神の血を引く者であると言ふことができよう。

第三の、出自を知らない英雄の場合については、英雄の出自をあ

る者が知らせるというモチーフを欠いたものであると考えることができると思う。言い換えると、出自を知らない英雄とは、天界の善神の子や孫であるということと、天界から降ろされたということを、知られていなければ、この場合の英雄も、天界の善神の血を引く者であると言えるかも知れない。

### 三、英雄の容姿

サハの英雄叙事詩において、英雄の容姿はどのように描き出されているのだろうか。『サハのオロンホの梗概』には、七五篇の梗概以外に、サハの英雄叙事詩の典型的な場面（遠征の場面や一騎討ちの場面など）のサハ語テキストが記されている。ここで、少々長くなるが、英雄の容姿が描写されているテキストを訳出することにしよう。訳文は、実際の語りの感じに近づけるために、逐語訳的なものにした。

さあ、みなさん、ご覧あれ！  
こんなに大変にすばらしい人が  
生まれたのだが、それなら、  
彼の浅黒い顔が、  
彼の美しい容姿が、  
どのようなのかと、  
よく考えながら

見てみると、

紛れもない真実だが、

九ブード入る

赤銅の大鍋を

ひっくり返したような

てつぺんが平らな頭があり、

肩胛骨の下まで

垂れ下がった、

雷鳥の

尾のような

ちぢれた髪があるのがわかる。

その下の方をじっと見ると、

輝く太陽に似た、

駿馬のように

大きく見開いた

美しくて優しい目があるのがわかる。

横の方からちょっと見ると、

満月ほどの大きさで

大きく丸みのある

白い耳があるのがわかる。

カムチャッカの山の

(二四の) 黒貂を

足を向げ合って置いたような

黒い線の眉があり、

中国の人跡未踏の山から

さまよって来た

赤狐を

並べたような、

寒風吹きすさぶときの

赤い頬があるのがわかる。

八歳の大鹿の

脛骨を

ひっくり返して打ち込んだような、

まっすぐに伸びた葦みたいな鼻梁があるのがわかる。

その下の方をじっと見ると、

開いた親指と中指の間およそ三つ分の長さの

銀色の

伸びた首があり、

その両側を見たところ、

六尋の

広い肩があり、

九枚の板で作った

舟を

立てたような

湾曲した背中があるのがわかる。

その両端を見たところ、

大きな太い落葉松のまん中の部分の太さほどの

二の腕があるのがわかる。

皮を剥いだ落葉松の

黒い根元の部分の太さほどの

前腕があるのがわかる。

それから、よく見ると、

森の中にある草地の丘のような、

銅みたいに輝く胸があるのがわかる。

（両端を）しつかりと縛ったような

すばらしい筋肉があるのがわかる。

黒い雌牛の

ふとももの肉を

切って、

ぴったりと何度もはりつけたような

前腕の肉があるのがわかる。

十匹の雄のオコジョを

頭を下にして搖すったような

十本の透き通った銀色の指があるのがわかる。

五尋の細く締まつた腰があり、

三尋の上に突き出た尻がある。

大きな落葉松のまん中の部分の太さほどの

ふともものあるのがわかる。

皮を剥いだような

まっすぐな

脛があるのがわかる。

月毛馬の

尻の皮を

剝いで

放り出したような、

大きな石みたいな足の裏があるのがわかる。

英雄の姿勢の描写は、頭から順に下の方へ進み、足の裏にまで達するが、そこには比喩と対句が豊富に用いられている。また、サハ

語テキストを見ると気づくことだが、頭韻を踏む箇所がかなりある。

例えれば、目を描写した四行はすべて「a」の音で始まり、頬を描写した

六行はすべて「e」の音で始まっている。実際の語りは非常に早口なので、行頭の同じ音がたたみかけるように聞こえてくるはずである。

サハの英雄叙事詩では、英雄は美しくて力強い者として、そして、巨人として描かれているのである。

英雄が身につける衣服や甲冑、英雄が持っている馬具や武器を描写する場面でも、同様に比喩や対句が多用されていて、これらは大変美しい物として描き出されている。

#### 四、文化英雄

『サハのオロンホの梗概』の中には、エル・ソゴトフという英雄を主人公とする叙事詩が九篇ある。その中の一つに登場するエル・ソゴトフは、文化英雄としての行為を成し遂げる。そのあらましは以下の通りである。

遙か遠い昔、地上世界に最初の人間が現れた。この男は出自を知らなかつた。男は、トランプのクラブのエースほどの大きさだつた大を、四つの縦ぎ目のある頭で広げた。ハートのエースほどの大きさだつた母なる大地を、まめだらけの足の裏で広げた。男には家も炉もなかつた。男は「人間は家と炉を持たねばならぬ」と思い、石で斧を作り、木を切り倒して、家を建て、炉と棚とセルグ（馬を繋いておく柱）を作り、乾いた白樺を擦つて、火を得た。そして、天界の最高神ウルング・アイー・トヨンに頼んで、ひとつがいの子牛とひとつがいの子馬を得た。

しかし、英雄がこのように、家を建てたり、炉や棚を作つたりする話はあまり多くない。その代わりに、たいていの話では、英雄や老夫婦が登場する前の場面で、敷地と住まいと炉の様子が、事細かに長々と描写される。このことから、英雄や老夫婦が家を建て、炉や棚を作つたという描写がない場合でも、実質的には、英雄や老夫

婦がこれらの物を作り出したと言えよう。その意味で、英雄や老夫婦は文化英雄であると見なすことができるのではないだろうか。

#### 五、英雄の遠征の動機

サハの英雄叙事詩には、英雄の遠征が附き物である。その動機は実に様々だが、その主なものを挙げてみることにする。

- ・英雄の妹やいいなづけや花嫁が、地下世界に住む怪物や女シャマノ、あるいはトゥングースの英雄アルジヤマーン・ジャルジャマーンにさらわれる〔註3〕。中でも特に多いのは、英雄の妹が地下世界の怪物にさらわれるケースである。また、女英雄の場合、馬をさらわれることが遠征の動機になることもある。
- ・他の英雄が来て、「妹がさらわれたので、救出して下さい」と英雄に頼む。息子と娘をさらわれた親や、兄をさらわれたいいなづけから頼まれることもある。
- ・地下世界の怪物が地上世界の乙女に求婚していることを、使者やワタリガラスや英雄の弟から知らざれる。
- ・地下世界から急使が来て、「地下世界の怪物が地上世界の乙女と結婚するので、おまえは彼の召使いになれ」と言う。誇り高き英雄は怒り、地下世界に赴く。のちに、英雄は、地下世界の怪物に結婚を迫られている乙女自身が、助けを求めるために機転を利かせて、急使を英雄のところへ遣わしたということを知る。この

話は先の三番目の動機の変形と言える。

・花嫁（多くの場合、天界の定めによって決められている）を捜しに行く。

・自分は強いと自覚している英雄が、好敵手を捜しに行く。

このような動機によって、英雄は遠征に出発し、時には変身し、時には馬や天界の善神や天界の女シャマンなどに助けられながら、敵を退治し、花嫁の両親の家で結婚を祝福され、故郷に戻ってくるのである。

## 六、変身する英雄

サハの英雄叙事詩には変身モチーフがとても多い。英雄もいろんな場面でいろんなものに変身するが、英雄がどんな場面で何に変身するかは、ある程度決まっている。その主なものをまとめてみると、次のようになる。

・英雄は遠征中、地上世界では馬に乗って移動するが、地下世界への入口で馬を家へ帰らせる。地下世界で移動するとき、とりわけ地下世界の怪物との戦いが長引き、別の戦場に移るときには、隼や鶯に変身することが多い。

・鉄の槍や鎧、先の尖った石に変身して、地下世界へ降りていく。

・三頭（もしくは二頭）のエクセクと呼ばれる鳥に変身して、海を

飛び越える。あるいは、鉄の魚に変身して、海を潜って渡る。

・蚤や栗鼠に変身して、木の中に入り、敵から身を隠す。

・鼠やみすぼらしい孤児に変身して、地下世界の敵の家に入る。

・みすぼらしい孤児や乞食の老人に変身して、花嫁獲得競争に参加する。

・魚に変身して、塩水湖で水浴する。そうした者だけが地下世界に行き、そこの怪物と戦うことができる。これは英雄になるための通過儀礼であると見なせる。

## 七、結末部

英雄の故郷に戻ってきた英雄と花嫁は、結婚式を挙げる。やがて子どもが生まれるが、それ以後に平和な暮らしが搔き乱されたときには、遠征に出かけるのは英雄ではなく、英雄の息子である。このように、話は一代目で終わる場合と、二代目さらには三代目へと続いている場合がある。

英雄の出自のところで、英雄が地上世界に住む老夫婦の子どもとして生まれる場合を取り上げたが、老夫婦のうちの夫あるいは妻が、かつては英雄であったと考えることもできる。事実、年老いた夫が若い頃の武勇を回顧する話もある。

サハの英雄叙事詩は、「英雄とその妻はしあわせに、裕福に暮らしかめた」とか「英雄とその妻から今のサハ人が発生した」という内容で締めくくられることが多い。「英雄とその妻は今でもしあわ

せに暮らしている」という場合もある。

サハの英雄叙事詩において英雄とは何者であるのかを、まとめてみたいと思う。英雄とは天界の善神の血を引く者であり、サハ人の始祖である。そして、敵を退治して平和なサハの地を築いた偉大なる者だと言うことができる。サハ語に「アイ・アイマガ」という言葉がある。日本語に訳すと「天界の善神の親戚」即ち「人々、サハ人」を意味するが、この言葉からもわかるように、英雄とは、血統の上で天界の善神とサハ人の間にあって、両者を結びつけている者と考えができる。サハ人にとって、英雄とは実在した者であり、今もサハ人の心の中で英雄は生き続けていると言えよう。

註釋

(1) サハは、日本ではこれまでヤクートという名で紹介されることが多かったが、彼らの自称はサハなので、本稿では自称を尊重してサハと呼ぶことにする。サハ人は現在、主に、東シベリアのレナ河とその支流の流域に居住していて、人口は一九八九年の調査で約三八万人である。彼らは牧畜狩猟民で、牛と馬を、極北地方ではトナカイを飼っている。

(2) それから、次のような話もある。「天界の最高神ウルング・アイ・トヨンは、老夫婦の間に生まれた二人の子どもの頼みを聞き入れ、地上世界に馬を送った。馬は子どもたちに自分を殺すよう言った。子どもたちが馬を殺すと、馬の皮から大きな家が、尻から食べ物がいっぱい入った二つの大きな倉庫が、前足のふと

「ももからお金が詰まつた箱が、腎臓から狼のような犬と熊のような犬が、頭から賢くて話すことができる馬が、蹄からたくさんのかみが、頭から賢くて話すことができる馬が、蹄からたくさんの家畜ができるがった。」この話はハイヌウェレ型神話の一種だとう見なすことができよう。

(3) トゥングースとは、サハがバイカル湖周辺から現在の居住地に移動する以前から、そこに住んでいた先住民族である。だから英雄の妹やいいなずけや花嫁がトゥングースの英雄にさらわれるという話は、移動してきたサハと先住民族トゥングースの間の歴史的な抗争を反映したものだと考へることができる。

(やました・むねひさ／千葉大学大学院